

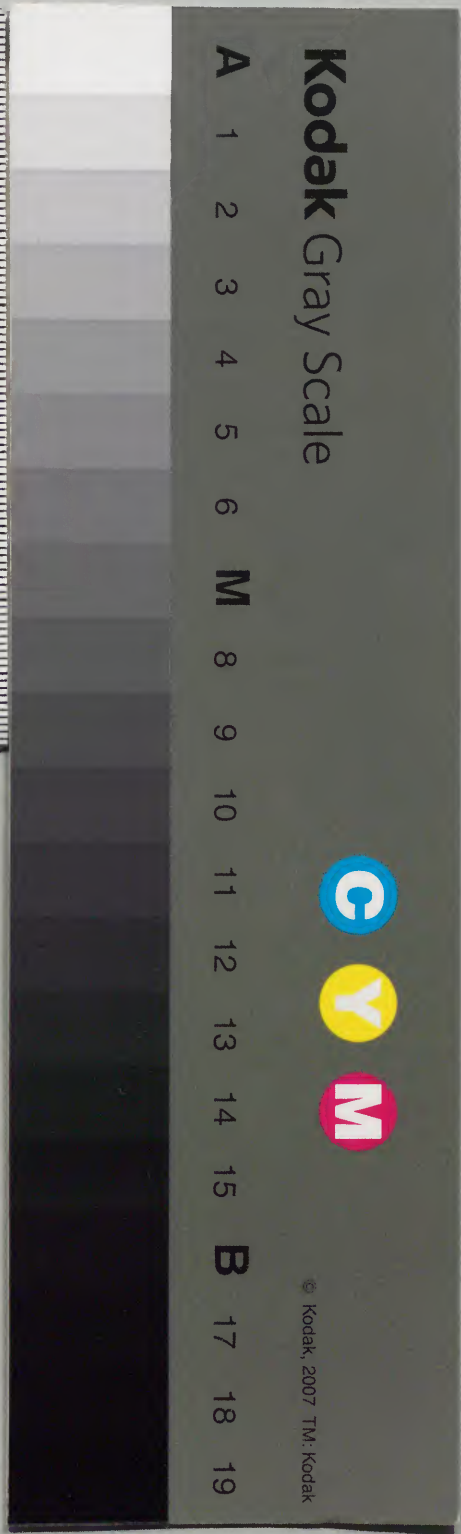
武  
雜  
記

四

			二三三六七號	和書門類
五册	一〇架	六二函		

庫文閣内			和書類
一五三二一	五册	二三三六七號	

内閣文庫	
番號	和 23367
冊數	5 ( 4 )
函號	153 340



武雜記抄卷之

目錄

尤あち十億

素願引

豆袋

佛指子の問出入

妻戸の問出入

貴人内へ請入申

座敷往来

物披房の時風吹



花廼家文庫

淺草文庫

人を送る

主君の御使を送る

祝言の玉物用捨

軍道具不洗

岡の声

具足着る時向方

歩行して笠さしをる

御酌は人次の献盃持出

提子役人の事

嫁入の時刀烏帽子金櫃

おおんを送持糸

神前御酌は事

長持に服帯

武雜記抄卷之四

貞丈抄

一 ちぬち十徳と申は下にたうまを常用してと申  
 十徳をちぬちゑにゑははるちぬち十徳あり  
 ちぬち中帯斗ありて十徳を常用はをちぬち十徳  
 と申て尾筆の事にてはちぬちもたうまの事とに  
 十徳を常用は事ハるち事ありては常をちぬちと  
 ちぬちにも深て申む中は又十徳の事とに常をも  
 仕ぬち

系ノ字書にちぬち十徳ハ師禁制ハちぬちと

其京郊將軍の御代をふち十徳の御禁制にて  
まゝにまゝけ所ふをふち十徳のまゝけを  
書きまゝに十徳の素襖の上と同ト仕まゝに  
ちりぬの素襖のふの服を遣はし十徳のふの服  
をも遣はて今も羽織の如く之業とちもあし侍  
の衣まゝに素襖の如くむかむもまゝにうき  
ふどの人まゝの衣まゝにむかむもあしふち  
衣とに羽織を衣まゝに如くあしけて衣の中帯  
とに小袖の上になり帯の袴も衣まゝに小袖の  
帯にまゝに斗りて十徳を衣まゝにふち十徳と云

之書とにふ布の白くもといひ白き候りて用  
之又深ても用之十徳の書布にてまゝに十徳  
所とふかむをい仕るとに十徳の上になり帯  
に白布をまゝに斗りて帯にまゝに一手にまゝに  
て袴ふも又帯をまゝにとりまゝにぬきまゝに  
ろきの人まゝに白布をまゝに斗りて衣の人の十徳を  
衣まゝに今も世にて羽織をうまを衣まゝに  
の侍に今も世を遣はし利替にまゝに看の十徳も  
本に書にて仕まゝに十徳と同し相の色とも  
今に袖のふちまゝに衣のぬきまゝに見ゆ





き小紋あり幸之人に集り世にとい主人其人  
あどにんろせ中幸にたると云候し其候の  
君といた方なき御ると云候なきつうおなき  
概も其事死人も君と云

一みううし此向出入の事大法めさうに候中此殿  
中御主殿と申言とりは志とみめてははけ  
殿にて御祝言ありし事には物々時々出入候事  
「吾等義の能又自給死人を申し候時みりし  
此とを御説し下より出し候候を免にし下を  
うり候の事い其よと申候

みううし「御指子にわしし「骨を奉盤の目  
所如く十文字に組むる物々黒くわくく一向  
の能をす分いとすり御説し世分下「うけ  
う祝にてうけ言ことめわしし「細きうぶ物  
みて上へ御あげ下のうしし「を申して其く  
まかうし此向出入と云「上めわしし「をと  
御あげある下を出入と云事之みううし「神  
社佛等候とめおにし其物之又原式物候の候  
にも其大法の候おきし「まはと「みううし  
此向出入候の子油も御き事ある事とも人々大



法め根に出入を睡ふ之殿中帝主殿に中ハ四  
言としに志とみりめていとハ言方攝の所  
帝主殿と云侍中を侍主殿とハ表向の侍中  
を之共侍主殿ハ言方ともにて志とみり志とみ  
とい戸の如くさ人をあげく打て板を法ふる  
抑くいと志とみハ必みりりの有所にハ有也  
之みりりハを有けハ有る睡くいと志とみを  
りりハ常の儀化めてあま戸をまらハ志と  
こり上と下事分りて我を有根に有るこい  
帝殿めて侍主殿に有る事には拘り時ハ出入

睡ふ事ハ有依いとハ侍主殿にハ志とみり  
言に有志とみり有にハ有るハ必あり抑く  
い主殿めて正月有侍主殿あり侍主殿の時  
ハ諸人ハ有るハ有るハ有るハ有るハ有る  
ざり事ハ有るハ有るハ有るハ有るハ有る  
いとハ有るハ有るハ有るハ有るハ有る  
人を有ハ有るハ有るハ有るハ有るハ有る  
有るハ有るハ有るハ有るハ有るハ有る  
有るハ有るハ有るハ有るハ有るハ有る  
有るハ有るハ有るハ有るハ有るハ有る

ある時を下をむ出せぬ事と是を人々見遠  
てとかくしをとり泊とある時し出せぬお  
とん泊するの誤之候にむ下平五の事ハ  
方由しくんといとかくしの下をむづして五  
時とのみうしと一泊あくづしとをあら  
して下平五事ハ死人を出る時の事あるが常  
々ハさまじうにさまじき事といふくしき事と  
みうしとの家次にいえるなり

一 毒戸の向出みの事 汚物ハ不潔ハ但常に出入  
を由しむに急なしとある時ハ毒戸の向しし汚出

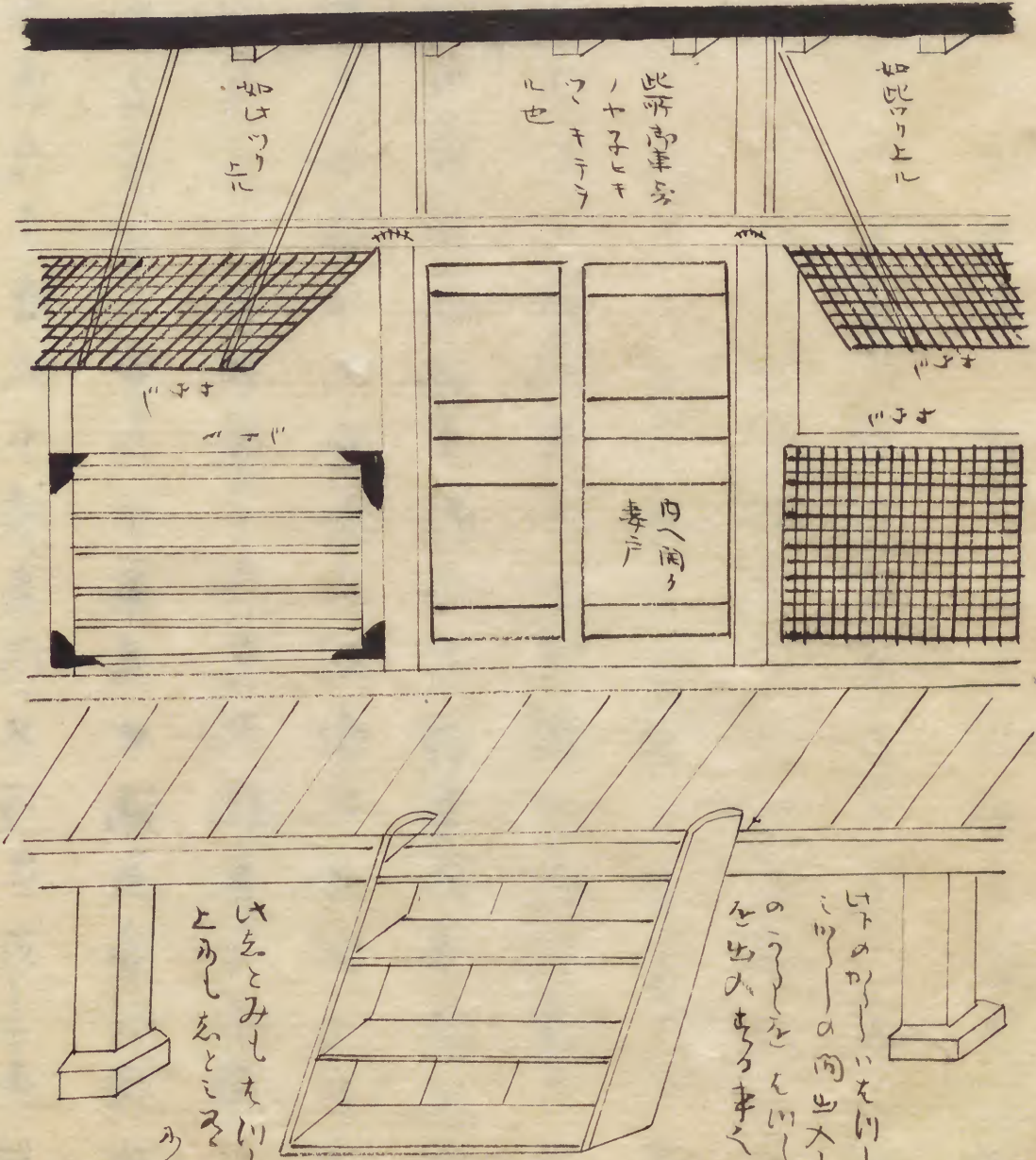
入の向ささくの時汚をぬきハ向平人出入  
辭列すれハ

毒戸ハ毒戸に到りきその事ハ右へ到らる  
是も所主殿に其私めても對面所ふとに候る  
客人出みの所之殿中にてハ公方様汚出みの  
所之汚物法ハ不潔といハ公方様より汚禁制  
ありハあきこ急なしとある時ハ毒戸の向より  
汚出みのとハ汚害汚車にめさる時或ハ公家  
大臣のとみ汚出の時ハ毒戸より出入しり  
こさねの時とい急なしとある時ハ汚をぬきとい

妻戸の裏に塚と同一の所に所を有す一丸く  
いさころうこ是、客人乗車ふとめて、  
る内あり車ふどのかうえをいさ所に  
をべき為にしるる物之を、かえを  
し一車より、あつゝ登き為の段之物色を妻  
戸、貴人の出入り、所あり、  
べき車く、ちの屋他將軍家、  
方に、園と云物あり、門を入て、  
室門をいさむ、屯に對面所の處、  
の家に、おし、いけを、  
おつて、  
おつて、

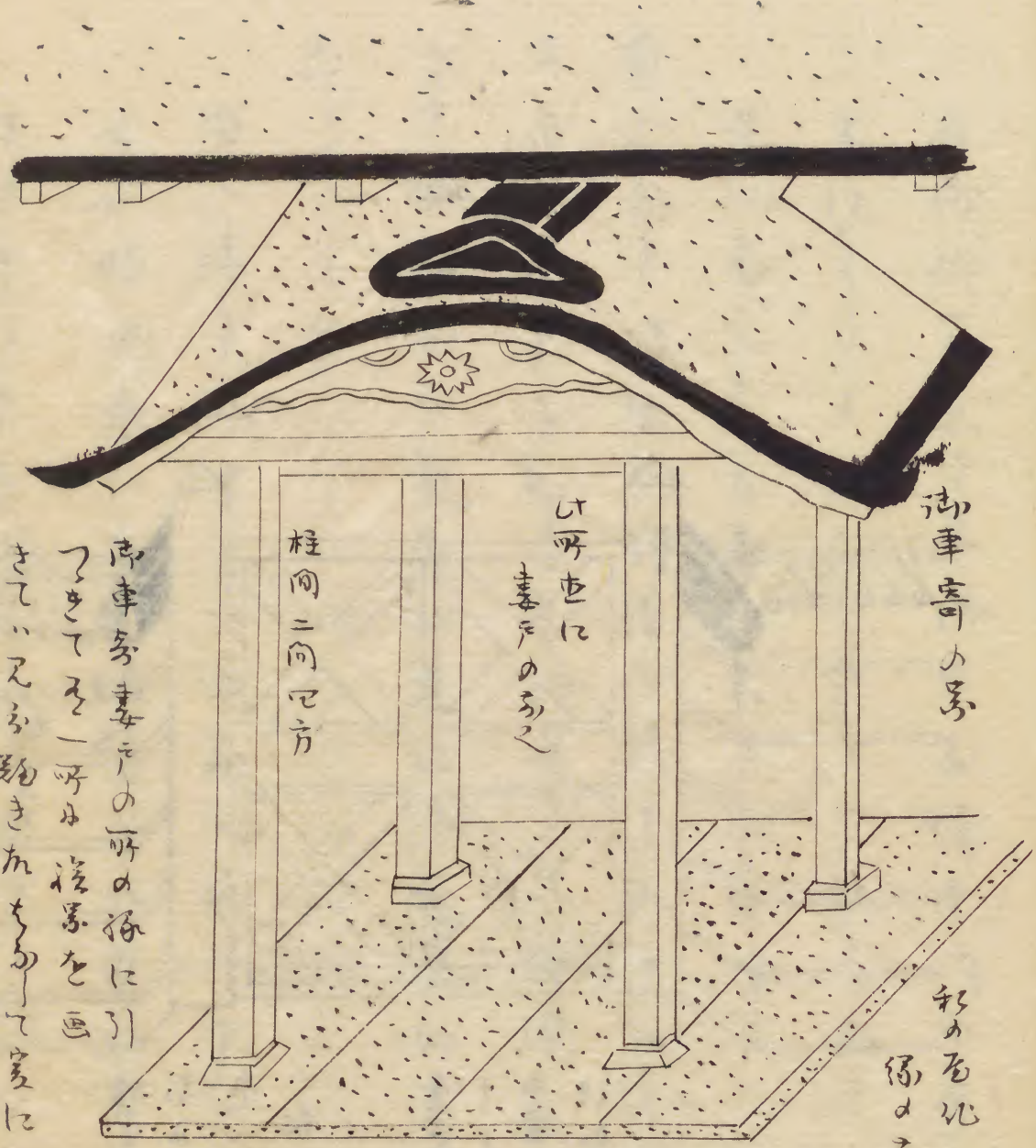
所へ通る、貴人の、  
家入ら、こ、  
以て考て、  
昔、  
御城大廣向、  
一志とみし、

人家ノ妻戸ハ  
内ノ開ク  
併神ノ前ノ妻  
戸ハ外ノ開  
御簾ナト人  
家ニテハ内ノ  
巻ヲマコマル内  
ニアリ  
併神ノ御簾ハ  
外ノ巻ヲキコ  
マル外ニアリ



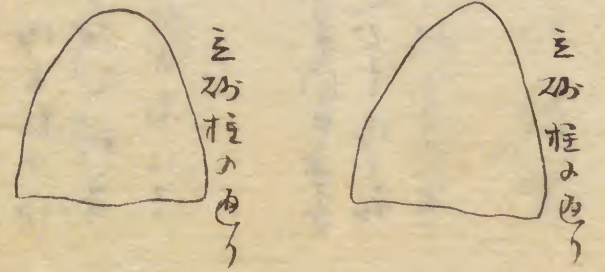
此下ノ階ハ内ノ開ク  
ノナ子ヒキノ向  
出大といハ下  
ノナ子ヒキノ向  
出大といハ下  
を出入ル事ナク

此所高車窓  
ノナ子ヒキ  
フクテテラ  
ル也  
如比ツリ上ル  
如比ツリ下ル



御車寄ノ家  
内ノ開ク 妻戸  
柱間ニ向エ方  
如比ツリ上ル

此下ノ階ハ内ノ開ク  
ノナ子ヒキノ向  
出大といハ下  
ノナ子ヒキノ向  
出大といハ下  
を出入ル事ナク





を打戸小うけうねを是を多きうねに仕  
こゝゝ縁の板といふの板なくうねのつぼを  
折く妻戸の下の言にうけうねを打て去うけ  
うねを板をよつぼみをして風にて戸を吹まざ  
うねにこゝを事く不意出れといふ客人妻戸を  
入る時風めて妻戸を吹まて客人思ひこゝを  
此かどを打破りふとく事ありまゝに中  
あゝとく多るとこ

一 諸人此石を以時も又常ありせむにて静かある  
べきめてい大足にあぢみの事おとろきまとして

古へよりこゝをい事にてい水足にあぢくはは  
む身ありとまき由りい

諸人此石をいとい主君りい川りまをい諸人  
を云く諸人と句を切てとむい常にしとい  
めいをまをい時めてあくともしと云事く静に  
るべきとい若しうにあういといおどろきま  
とい大いあまありけを物に登るう板ありま  
つきありを云身ありい身のみなりふををり  
貞丈云中ををありくにまをふりてあま  
人し兄若くまおまを弟の下の言あま







と為きあり

一 主君の侍候ありしは一毛の、ゆりく侍送り有  
一 送りぬ鹿をむ二送り二送りの鹿を三送りの  
ゆりくべし

常に一送の鹿こしも主君より侍候に有り  
ありた二送する之帯に二送の鹿ありた三送  
しつこ是を一毛ゆりく送りと言ふ

一 弔言に付て毛の物を用捨の事之脈の流るに  
り征矢をい時きりふの羽付る矢用捨の事と  
の入れ様毛のるぬふりばれどに不用杖あり

毛のじりちきうみわりの鞍、ゆりに火性  
馬火打袋もも多毛の衣裳系さげ扱とえき之れ  
どて毛用捨物に流るに標句ホるるる也

弔言といふてめ流るるる用捨の事とい  
遠きしてをさぬ物之征矢、軍陣に用る矢に  
かてきこころがり矢ふとの類く切符の羽に己  
一の羽にきりふるきりふの切符と切くし中  
まに一切文之文の紋と同一人めて羽の毛を  
うをきく切符の羽の紋に毛き不と白き所と  
あきつらにききこがきるるをきりふを元

腋にツビ事い元腋い骨にあり流垂之骨い腋  
をきり首をきりふど云事いいまくしき事ぬ  
ぬきりふし云急を急く儀毛の馬いさるの毛  
色の馬の増礼にいさると云事ぬ儀毛ぬ  
に安て初ぬこうつほのほふどに不用とい是  
い毛皮をうけさるう川ほのほい地き方を云  
儀の皮をさるうりほをた不用こさる皮毛の  
うつほ骨べくどと列の書に有是とさると  
云を急く秋ふし毛ぬむらなきといむらなき  
い麻ぬ皮ぬてゆくの麻ぬ皮ぬ秋ふし毛と云

事ぬ麻ぬ毛い四季に安て暖く色変るゆへ  
の古毛い毛く秋に安てたえさる新毛い緩  
くたえぬし安て毛を急くゆへさる毛をた急  
すてのけさるく若毛より少色あくぬて白  
黒ぬむりに初しぬ毛ぬけ皮にて急ぬを伏  
ふし毛ぬむらなきと云むらなきい時ぬの時  
又い麻骨の時ぬくゆへ急ぬぬぬにてうし  
いゆきゆへ急ぬに急ぬゆへ急ぬ増礼ぬ急ぬ  
い秋を急ぬと云事ぬに急ぬぬぬ又急ぬ  
毛ぬ急ぬと云も急ぬ急ぬと云顔に急ぬ急ぬ

とめ入に二房と云事を忘却しうみおりの  
くくと「鞍」が帰後帰とりにあめきをえ  
る如く帰の表の中節よく有まをうみと云  
字節あきをうみおると云ことめ入「子をう  
む」き為こ「お」と云「うむ」事おると云  
やうに穿つる所忘し「返」ゆ「尾」ゆりあう  
大性ゆる「く」毛を毛を云馬にふの性  
有毛あり毛「本性」之麻毛「毛」土性之  
か「く」毛月毛「令性」之黒毛ふち毛「令性」之  
く「く」毛を毛「大性」之「く」ゆ「に」大を忘

こさきを大性之馬を嫌ふ「大」お袋の事家に  
記「毛」色「赤」黒く「少」毛も「ま」り「あ」る色  
あり「毛」の「赤」皮の色に似「あ」る「毛」を「色」と  
云赤下「赤」下「赤」の「下」下「赤」ゆり「赤」き  
「大」め「色」こ「と」えきと「大」め「と」え「所」の「初」に  
通いて忘し「と」て「返」ゆ「に」大の字「り」き  
あう「相」あきを忘し「大」の「赤」を「さ」く「あ」る「禁」句  
「い」ま「く」し「き」初「に」進「め」し「に」限「る」是「初」にも  
「返」系「に」付「て」忘「事」ハ「ソ」ゆ「ゆ」づ「き」こ  
一軍「返」し「あ」る「を」ぬ「事」之「跡」に「幕」を「不」可「洗」新

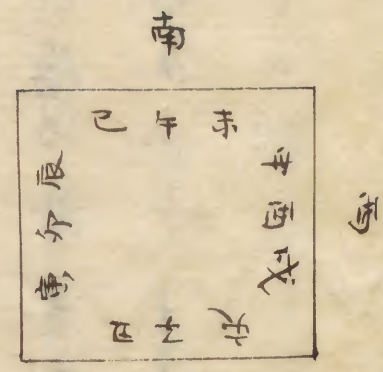


顔に對して令戰を始す時ときめ声を上る  
又軍の移るる時ときめ声を上る先をかち  
ときと云

一 異是是はる時吉方りくを依め時ハ依きも折  
至南方へ向幸之又子同守神め方と云ハ方へ向  
一 子の日ハ寅め方へ向一 其日の子同  
方あり

異是是はる時吉方とハ依はる時向て吉事  
方を云色くとい守神め方玉女め方などを云  
に依め時とい欲押寄て急に依はる方角め

吉凶を考ふるにまもるべき時を云こ  
ハ其日のえとより子めの子め日ハ子丑寅と  
子め之寅め日ハ亥子丑と子同日ハ北東  
北向く又玉女め方ハ辰未と子同日ハえと  
より子同の子め日ありを子丑寅卯辰巳午未  
申と九つハ守神め方ハ玉女め方ハ日に依て  
北に當り幸るべし北ハ大に急るべきときハ  
其時めえとより方へ向て是秘傳く



十二支方角如此

一 うちにて筆をさしからる事たよりさしうけ  
物

筆とい長柄めう筆く長柄めかうさ馬  
上さしをる方に柄を長くさる物と物  
両方の時めさしをさしを客にさるさき

ふり

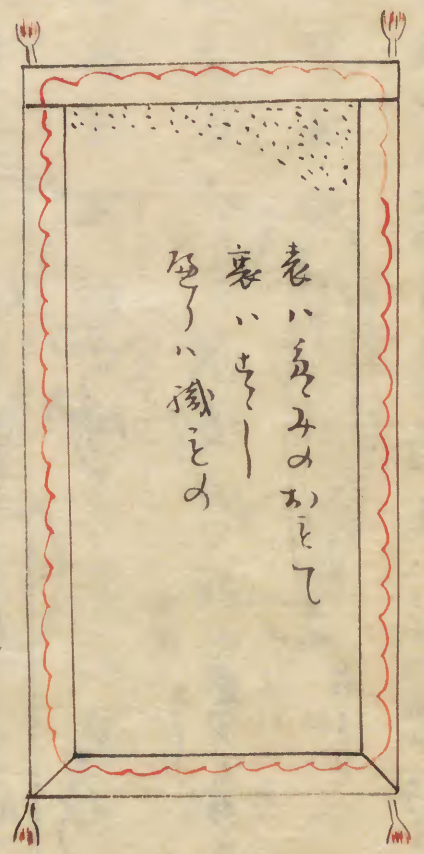
一 脚酌をさる人次の執の時いふの砂盃を出し  
う房床義兵の申中い出法不定の由先し中義兵  
脚酌をさる人次の執の時いふの砂盃出とい  
多くとむ初執の時脚酌をさる人二執の時  
い脚酌を持出ると云類をこそを本受こと中  
人い出ともかひ定る事いあき申あ々  
中あしあると己早のまいぬとむい  
えんとむ心人あ申中あしあしぬとむい  
一 提子の役人中申にもさる又さるくい砂盃







ししろの帯



表ハ多々みのおとし  
裏ハ多々み  
帯ハ織との

帯の付法とハ如ク一文書き

裏の付法

枕



一言ハ家の  
紋一言に  
ハ模を置く

下ハ如ク  
もちろんに

合はるに

帯りの廣さ不定なるに云々多々し物とも大概  
の分量を増入の記に云表ハ二寸四又三  
寸あり裏ハ見よき程ハお斗りべきことめ方  
ハ帯りを横に色を下ハ多々み令せらるるべし

付法一法ハふさめ事ハ四隅にふさを付己  
ししろをたうもいしろとも云はるゝと記の上  
に表ハくむしろを中と云と記をふとん  
と云事ハ昔ハあき事ハ古前にきくくも吟や  
表板のさむしろはとも免るもいししろの事  
ハ又云古ハ中と云ハ今云あけ多々みの事ハ  
吾人ハ多々の上にも又多々をたて中かきくこま  
を中と云ハ昔の事ハてハあし  
しめ物ハ長さ又尺多々ハ一物ハ記に見  
え多々今文云を中してハあき程に記云ハ



一むろ 二むろ 三むろ 四むろ 五むろ 六むろ 七むろ 八むろ

ろ	
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ

是よりとをよにむろ

は一むろ神にあり

は二むろ裁分かんむり

右の記は裁根の婚途記に裁根たの物

ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ
ろ	ろ

左の婚途記のむろ根く婚途記云とのおおの裁根の事ゆふけあふくおさーに又ふさすゆあさゆへの事まよる急り出てゆるりさきよ

いむろ 出れ一むろにむろをてにてはゆあく  
む一むろをさけあーあちの根にして節途にも  
然してはゆあをの下ゆあつまは上あにいと  
つきは ちこいこいふさの事こいこいこいと  
まの事あり

一 於神系ゆあ不ろむり裁はうろを神系に向向  
あむ

於神系ゆあとい主人所系の時神系にて神兩  
をゆあ裁の時を事く不ろむり裁といかた  
ある事もありこ

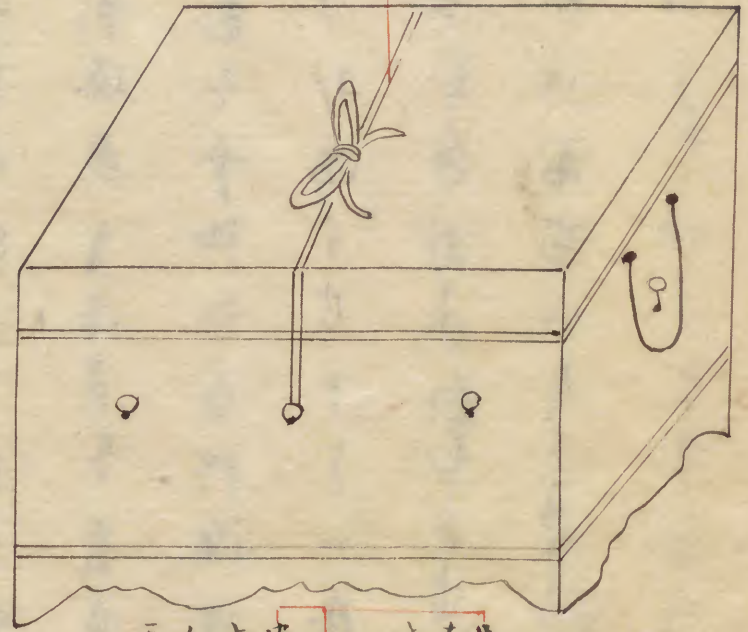
一長持にちりむと中事不存に但とらんに付んか  
えまてにていさくくの間布にて多きけ襦を紅  
い 色を中ぬれ折返うせてちりむと中事ハ不存

長持ハ今時の長持の如く増人の記を揃りに  
長持の夏冬形ふどめくううも長持のちり  
にくうんを所し折こもむと中事不存とい  
世間めて長持のちりむと云名目を云所昔名  
目いちりむと云事くくうんの付いふえめて  
にていさくくの間と長持にくうんを折て

皮の襦を折てふくめとにて襦ふに其皮の襦  
斗めていさくくの間布めて長持を襦ふに  
て多きけ襦を仕んと白布を一ち長持の  
襦のかわりしてふくめとにて襦ふに白布ハ  
皮の襦のちりむを多きけ襦ふに多きけ襦と云  
こ色を中ぬてとい襦の事をちりむと云紅と  
あり折返うせてとい本名の襦にりよをちり  
ちりむをちりむと云之婿めの記にちり  
おむハ白布一ちりめてちりむと云事いさくく

長持

皮張とい  
は事之皮  
のくまを  
こ



是を  
ちろむ  
と云ん  
を  
皮張の  
と一かけ  
白布を  
うけて  
洗



いんらんはちんををてちんは宛をぬていんらんをちん  
わしてたのくけをゆていんらんを一一みりえみてま  
んを押つる者は一ちん

